



ピッポ新聞

2009

7

No.245

子どもの本専門店

ピッポ

年間購読料 (送料込み) 1500円

編集・発行 伊藤俊男

〒424-0886

静岡市清水区草薙1-6-3

TEL & FAX

054-345-5460

URL <http://www.pippo.co.jp>E-mail itoh@pippo.co.jp

骨董市

「君はまだ脇が甘い」

骨董市の会場は、市立清水病院の手前の道を山（日本平）へ向かって登っていく。そこは振興の住宅地で、チラホラまだ畑や空き地があり、開発途上といった場所である。暗いので定かでないが、大きなコンテナ（貨物の貨車かも知れない？）をいくつか置いて連結したものであるようだ。

中には今日競りにかけられる品ものが雑然と置かれていた。小物はお盆やプラスチックの箱に入れられ、大きな物は部屋の外などに置かれていた。出品物は陶器や漆器・ガラス製品・古文書・巻物・本・古絵葉書・さびた道具・古着物・ついたて・壊れた電気製品……。思いつくありとあらゆる古物が並んでいる。この骨董市で扱わないのは、おそらく、生ものと爆弾などの危険物だけではないだろうか？ 言い方は失礼だが、戦後の闇市（といって書物でしか知らないが）こんなではなかったか？ と思わせる雰囲気がある。

ぼくは良くテレビなどで、外国の美術品のオークション場面が映し出されるのを見ていたので、それにちかい雰囲気があるのだと思っていたのである。もっとも、あの外国の会場ではネクタイをきちつと締めた紳士や淑女が参加しているが、ぼくの服装たるやTシャツにサンダル履き

という出で立ちであるし、回りもみなそんな格好の「紳士・淑女」が七、八十人ぐらい集っているのだ。欧米の紳士淑女が集うオークション会場をイメージすること自体が誤りというものである。

連れてきてくれたSさんに、主宰者を紹介され、参加費の千円と「古物商許可証」を提示した。前から興味はあったのだが、ぼくが扱う古書子どもの本だけでなく、あらゆるジャンルに広げたことを契機に、仕入れの範囲も拡大することにしたのである。

以前にも書いたが、古本屋が「古書」を仕入れる方法にはいくつかある。最も安定した仕入れが可能なのは古書組合主催の市会だ。これは売るのも買うのも古本屋で、最大のものは神田の古書会館の市会。ぼくはここに月に1、2回参加している。この他に神奈川の組合主催の反町の古書会館へも出かけるし、浜松の月1回の市会にも必ず出席している。

しかし、この市会での仕入れの欠点は、値段が高いということと、掘り出し物がまず望めないことだ。

どうしても欲しい本ができれば、思い切って高値を付けなければ、落札できないし、高値を付ければ利幅が小さくなるのだ。神田ではよく絵本なども出品されるが、例えば、ぼくがこの「絵本の本」はせいぜい8千円までだろうと入札すると、この2倍以上の1万8千円で落札されることなどしばしばである。最近はこの本を

(10 頁に続く)

ピアンキの名作『くちばし』 二つの版の謎をとく

第十三回

”「見解」は福音館の

苦悩の現れ”

動物学者 今泉吉晴

2009年6月20日、私は調布教育会館で開かれた、日本子どもの本研究会の研究サークル、「子どもと、子どもの本をめぐって」の第二回講演会にかけつけました。波木井やよいさんの講演を聞くためでした（演題は「『せむしのこうま』など、抄訳・翻案について」でした）。

波木井さんは1970年9月、ピアンキの『くちばし』の訳者である故田中かな子さん、清水道尾さんと「せむしのこうま」の作品研究グループを結成しました。そして、30ほどの出版社から50ほどの日本語版が刊行されていたエルシヨーフの『せむしのこうま』のうち入手できた45の日本語版をくらべ読みしました。

日本語版『せむしのこうま』には大きな問題があることが明らかでした。『せむしのこうま』のロシア語原本は詩でつづられているのに、作品研究グループが調べた

の日本語版のうち、ロシア語原本の全文を詩の形で訳した版は、網野菊氏の訳による岩波少年文庫版（1957年刊行）一作だけで、当時すでに絶版でした。

つまり、45の日本語版のほとんどは詩の形をとっておらず、詩の形をとっているものがあっても部分的で、それらをひっくるめて大多数は文章の省略と書きかえの多い部分訳、ダイジェスト、あるいは翻案でした。

そこで、『せむしのこうま』の作品研究は、作品の「命」である詩の形をとらない版、あるいは詩の形をとっていても、同じように作品の「命」にかかわる（作品の地域色とか主人公の性格描写といった）要素の多くを欠落させた日本語版をどう評価するか、という課題になったのです。

それは今まさに私が取り組んでいる批評とほとんど同じ課題ですが、波木井さんらの作品研究グループははるかに実際的であり、行動的でした。

これはと思う日本語版をさまざま年齢グループの子どもに読み聞かせし、あるいは読んでもらって、「一年、二年では、自分の読みにならなかつたのが、三・四年では、ほとんどの子どもが、内容を読みとることができています」と報告しました。さらに「本当のいい作品であつても子どもに与えるからという大義名分によつて作りなおされたり、切りぎざまれては何にもなりません。

与えるグレードを考えればよいことで、分かる年齢になつて与えるということをし、

本づくりの面でも考えるべきだと思うのです」（1973年1月発行の季刊「子どもの本棚」6号の特集「せむしのこうま」と問題のありかを明らかにしています。作品研究グループは、『せむしのこうま』の原作がどう読まれ、評価され、また研究されているかをロシアに訪ねるなど、2年あまりにわたつて広範な共同を組織しました。季刊「子どもの本棚」6号の特集「せむしのこうま」は、成果の報告です。



「季刊 子どもの本棚」6号
(1973年)の表紙。

さて、私が今号の冒頭で波木井さんの講演をとりあげた理由は二つあります。一つは同じ方向をみすえた人とのつながりの発見です。40年近くも前に力をつくしたグループがあり、今もその思いをあたためている、ということに大きな意義を感じました。そこで今回の批評にもグループ研究のよさを取り入れたい、と考えました。

もう一つは私のこの批評と直結することですが、これまで私がとりあげてきたピアンキの『くちばし』の訳者、田中かな子氏が「せむしのこうま」の作品研究グループ

に属して活躍された事実をお伝えしたかったからです。

この共同研究は田中かな子氏にとって大きな意味を持ちました。季刊「子どもの本棚」に共同研究の報告がなされたあと、10年の努力をかさね、「ご自身が詩のスタイルで「せむしのこうま」を訳出されることになったからです（理論社、1984年）。

この美しい本の巻末の「解説」で田中かな子氏はこう書かれています。

「今から10年も前『子どもの本棚』誌（1973、6号）が『せむしのこうま』の特集をした時、私は「せむしのこうまの誕生とあゆんだ道」という論文を書きました。研究グループで調べていくうちに日本でもあり、そのほとんどが完全な訳ではないことを知りました。読者からの要請もあって、何とかして、この本の完全訳にいたいと考えた私は、伝承文学の権威であり、『せむしのこうま』の研究者として知られるモスクワ大学教授、V・P・アニーキン



P. エルショーフ著 田中かな子訳「せむしのこうま」の表紙。

さても 話のはじまりは。「せむしのこうま」の冒頭をかざるD・ドミトリエフの絵（p.8）背景に丸太小屋が描かれています。



氏の教えをつけ、一行一行を原文に忠実に、またそのリズムと韻律を正確に伝えようと試みました。」

共同研究から優れた訳がつくられた経緯を伝える文章で、私たちにとって大きな意味をもちます。同じ人がビアンキの『くちばし』の訳を刊行していて、その原本に私が「オリジナル版」と呼ぶ版を選んでいるのにははつきり理由があった、と考えるのが自然です。

なぜ底本を変えたのか

今回も福音館書店の「見解」をとりあげます。前回は「見解」2をとりあげ、まだ実はすべてを論じつくしていません。しかし、全体をみて、もう一度もどることで、

いつそうよくわかることもあるので、ひとまず「見解」2は終えたことにして、田中友子氏の訳になる『くちばし』どれが一番りっぱ？』で、「オリジナル版」から、私が「簡略版」と呼んでいる版に変更した理由をのべた、「見解」4「くちばし」どれが一番りっぱ？』の底本変更について「をとりあげます。

「見解」4は文章量が600字近くあって比較的長く、三つの段落に分かれていることから、段落ごとに一つずつ検討します（三つの段落をここでは、それぞれ「見解」4のa、「見解」4のb、「見解」4のcと仮に呼びます）。

「見解」4のaはこう書かれています。

4 『くちばし』どれが一番りっぱ？』の底本変更について

ビアンキのテキストには2種類あり、それぞれ1924年と1938年に初めて出版されています。その大きな違いは「それで、だれのくちばしがいちばんいいのか、いまでもわからないのです。」という一文が最後にあるかないかです。この作品をロシアの蓄積話の系譜としてとらえたときに、この一文はないほうがよいと判断し、最初に出版された1924年版を底本に選びました。その際、エレナ・ビアンキ氏（著者の娘）の助言も大きな力となりました。

私が簡略版と呼ぶ貧弱な文章の版は、米山書籍編集部長の右の文章では1924年

の版にあたります。「見解」は、これら二つの版の大きな違いとして、オリジナル版の最後の文章が簡略版にはなく、ない方が作品として「よい」と述べています。

しかし、私は善し悪しの判断のまえに、米山氏の最後の一文「それで、だれのくちばしが いちばん いいのか、いまでもわからないのです」は間違いであることを指摘しておきます。この文章では「わからない」のは「だれの くちばしが いちばん いいのか」です。

しかし、原文は題名と同じ文言が入っており、それは「誰のくちばしがもつといいか、今もわからないままです」と訳さなければなりません。つまり、「わからない」のは「誰のくちばしがもつといいか」であって、くちばしは比べることができない、とっています。私は、この文章をそのように訳さなければならぬ理由と、この最後の一文が欠かすことのできない大切な役割をになっていることについて、ピッポ新聞2008年10月号、p6で詳しく論じました。

さて、米山氏のようにもし、一文のあるなしが二つの版の大きな違い、というならば、私がこの連載のキツツキの項で指摘したもう一つの一文のあるなしも「大きな違い」に入れるべき、と主張したいと思えます。簡略版に「食物のことばかり考えていてはいけない」、という一文があつて、きついで一言になっています。

というのは、もともと食物の獲得がテーマであるこの物語に、この一言はルール違

反、あるいは不規則発言であつて、文脈を変えて作品世界をこわし、読者をまどわすからです（この問題についてはピッポ新聞2008年9月号、p4で論じました）。米山氏はこの一文のあるなしの違いに気付かなかつたのでしょうか？

それに「大きな違い」とは何でしよう？

この作品は緻密に自然を描いています。一語一句が作品の全体に大きく影響します。たとえば、私はシメの項で、オリジナル版に「パチツ！ ほら、われた。ひとかみだ」という一文があり、これが簡略版では削除されていることの大きな違いをあげました。自然の中でじっさいにシメを見ている人でなければ書けない文章であり、シメらしいしぐさが見事に捕らえられていて、その有る無しは作品の質に大きく影響します（ピッポ新聞2008年6月号、p8）。私はそのような小さくても大きな違いになるような記述をピッポ新聞2008年6月号のp8にまとめられています。

すなわち、「見解」4のように一文のあるなしで二つの版のよしあしを判断するのは間違いです。細部の記述の違いの大きな意味も見なければなりません。そのことによつて、「見解」4や田中友子氏とはまるで違う作品評価になることを、私はこの連載でくり返し指摘してきました。ここでこれ以上くり返す必要はないでしょう。「見解」のつぎの段落にすすんで別の面から米

山氏の考えに反論します。

つぎの段落、「見解」4のbはこうなっています。

通常、底本は新しく改訂されたものを使うのですが、後で発表されたヴァリエーションが常に優れているわけではありません。この作品の場合、1938年版が出版されたあと、1924年版は平行して出版されており、むしろこちらの方が数は多いという点から見ても、ビアンキ自身が、ふたつのテキストに優劣をつけていなかったのだらうと考えています。

ビアンキはナチュラリストです。二つの版の文章は自然の表現として見てまるで違うことを、私は論じてきました。幸い、私の訳によらなくても、二つの版は網野菊氏による岩波少年文庫版（底本は簡略版）、それに田中かな子氏の訳による福音館書店版（底本はオリジナル版）とあつて、しかも二人の訳は共に田中友子氏の訳とはまるで違つて原文に忠実な訳です。

比べ読みすれば、私のいう自然の表現（鳥の生態の記述）の違いがすぐ分かります。米山氏は、ビアンキが二つの版に優劣をつけていなかった、といいますが、何の根拠も示しておらず、単なる憶測です。ご自身がどう判断するか、最後の一文のあるなしだけでなく、違いはたくさんあるのですから、少なくとも網野氏と田中かな子氏の訳文は読んで、責任のもてる検討をする

べきでした。

そうすれば必然的に、問題は簡略版とオリジナル版の違いもさることながら、田中友子氏による訳文が、つけ加えの多い、原文からはなれた文章であつて、簡略版とオリジナル版の違いどころか、どちらとも大きく異なる版になつてゐることがよくわかつたはずだ。

それに福音館書店は、先にオリジナル版を選んでいたのでから、過去の自社の判断と切り離して今回の判断だけの理由をあげるのは片手落ちです。網野菊氏の訳による岩波少年文庫版が簡略版を底本にしていたのに対して、かつてオリジナル版をよしと判断したからこそ田中かな子氏の訳があるのです（判断材料を提供したのは田中かな子氏だった可能性がありません）。

その時の担当編集者が松居直氏であることは、絵本に関心のある人たちの間では広く知られています。というのは、松居氏ご自身が成功した絵本づくりの一例として、田中かな子氏の訳に藪内正幸氏が絵を描いた『くちばし』の誕生の経緯を詳細に紹介しているからです（『絵本をみる眼』、日本エディタースクール出版部、1978年）。

したがつて、「見解」としては、なぜ当初の判断がオリジナル版であつたのか、その理由を示した上で改めて簡略版にもどすことになつた理由をのべる必要があります。

それに松居氏は、自著の中でオリジナル版の文章にあわせて絵本の絵の展開はこ

でなければならぬ、と独自の理論をのべています。にもかかわらず『くちばし』どれが一番りつぱ？』では、底本を簡略版に変更しました。そのため、たとえばハシビロガモの項では、絵を逆版にして話のつじつまを合わせる必要がありました。そうまでして底本を変える必要があつた事情にもふれないと、説得力のある「見解」になりません。

さて、以上、「見解」4の「とbについて、私は書き手である米山氏の視野の狭さを批判したことになります。4のaについては、最後の一文の有る無しという貧弱な判断基準を、4のbについては、自社の過去の判断との関係を問うていないことを、批判しました。

なぜ、福音館書店書籍編集部長ともある人物が、狭い視野でしか作品を見ることのできなないか、それは判断材料を田中友子氏側に頼つていて、独自の作品研究がほとんど何もできていないからだ、と私は判断します。なぜなら4のaとbに書かれてゐることは、後づけの説明にすぎません。

4月16日にあつた「子どもと、子どもの本をめぐって」の第一回講演会（のちです。私は田中友子氏の『くちばし』どれが一番りつぱ？』の訳について福音館書店科学書編集部にそれぞれ独自に問い合わせたお二人から、どのような対応であつたかを知らされました。どちらの方も、担当編集者がすでに退職してお答えできない、といわれたと懺然とした表情でした。

つまり、同じ部門に属していても、他の

編集者の仕事と作品には無関心であつて、答えられないのが現実です。それは私の経験ともよく一致します。そこで、私の科学書編集部への問い合わせの経験から、なぜ、担当編集者の退職が、問い合わせに答えられない事情の説明になつてしまふのか、その原因について考えられることをお伝えします。

福音館に問い合わせた私の経験

私は2006年4月～5月に、刊行されてまもない『くちばし』どれが一番りつぱ？』を読みました。本書の刊行は福音館書店科学書編集部の手記の形で「母の友」2006年2月号で予告されておりました。そこにはこうありました。「新たな試み」として「以前『子どもとも』で出た絵本を、もう一度別の視点でとらえ直して、科学の本としてあらたに出版する」。

ビアンキの作品はもとも自然の魅力を伝えるもので、科学的であると同時に科学を越えて人間的です。『子どもとも』で訳そうと、科学書編集部の絵本として訳そうと、一つの作品がかわるはずはなく、私はおかしな考え方だと疑問をもちました。

新たな訳者である田中友子氏は、すでに福音館書店から『おしゃべりなもり』を刊行しており、疑問の多い訳であつたことから、「科学の本としてあらたに出版する」のに適切な訳者なのだろうか、と心配でした。

じっさい、読んでみて特に気になつたの

は物語の結末部分の大きな違いでした。終りの一文がないことも気になりました。けれど、それなら、ヒタキがタカに捕らえられたところで物語が終わるはずであるのに、そのあと物語がつづいていて驚きました。

私はピツポ新聞2008年9月号で、田中友子氏による『くちばし』どれが一番りっぱ？』の終わりの文章と、私の訳によるオリジナル版の終わりの文章を比べました（p10）。参照していただくと有難いです。ここでも末尾の文章を見ながら論じたところですが、同じ比較をくりかえすより、『くちばし』の田中かな子氏の訳文を見るいい機会ですので、それを田中友子氏の訳文と並べて見ることにします。おなじ藪内正幸さんの絵を使っていることから、どちらの末尾の文章も同じp26になっています。

田中かな子氏による結末の訳文

ところが とつぜん、 たかいところから、かぎのような くちばしを もった はいいろの オオタカが まいおりてきて、ヒタキをつかむと、じぶんの えさに さらっていつてしまいました。

あとに のこった とりたちは、びつくりぎょうてん、みんな ぼろぼろに とびちつていきました。

それで、だれの くちばしが いちばんいいのか、 いまでも わからないのです。（p）

田中友子氏による結末の文章

そのときです。鳥たちの上を黒いかげがよこぎつたかと思うと、するどいくちばしのオオタカがさつと空からまいりました。そして、がんばりようなつめでヒタキをつかまえ、あつという間にとびさりました。みていた鳥たちは石のようにかたまつたまま、しばらくじつとしていました。それから、はつと気がつくと、「あのくちばしでひきさかれたらたいへんだ！」と、大あわてでにげていつてしまいました。そのにげあしの早いこと！鳥たちのすがたは、もうどこにも見あたりませんでした。（p26）

傍線部分は、後にロシア語原文を調べて相当する文言がない、と私には思えた文章ですが、最初に読んだ2006年4月5月には違いの原因は知るよしもありませんでした。「見解」4のaにある米山氏の考えでは簡略版を底本にするのは、オリジナル版の最後の一文がないことによるゆえです。けれど、簡略版の訳本である現実の『くちばし』どれが一番りっぱ？』の終わりの文章は、一文がないことより、三文ほど余分にあるというおかしな事態になっていたのです。

それは、田中かな子氏による旧訳を知っている読者を混乱させるでしょう。そんな読者には、巻末の編集部による注意書きが唯一の頼りになります。私もそうでした。そこには先の引用のとおり、「底本を変

更したため、26ページの結末など、上記『くちばし』と変わっている点があります」と書かれていました（巻末の五つある注意書きの中の四番目）。となれば、新訳が三文ほど余分なのは、底本の変更のためと考えるより、読者には手がありません。福音館書店のホームページをみると、「本書では、テキストは『こどもものとも』版とは別の底本を使用しました。そのため、作品の構成も変わっており、特に結末部分は大きく変わっています」とあり、すこし間をおいて「あつと驚く結末」もある、とそえられていました。これでは納得どころか、ますます疑問がふくらみます。

私は同じビアンキの作品に、これほど違う版があるのか、と驚いた次第です。それに、新訳の記述の鳥のふるまいが不自然で、また、動物行動学がなかった時代に鳥の行動の細部に関心をよせるナチュラリストがいるだろうか、ビアンキの関心はもっとスケールが大きいのではないかと疑問も感じました。

そこで、いったいロシア語原文はどんなふうになっているのか、みたくなつたのです。ところが、『くちばし』どれが一番りっぱ？』の奥付には底本の版についてのロシア語の記述はなく、捜しようがありません（私は翻訳のもとになった底本を翻訳書にきちんと記載しておくのは、訳者の責任と考えています）。そこでロシア語原本は何か、まずは科学書編集部に問い合わせたのです。私は『くちばし』どれが一番りっぱ？』の原本を図書館などで捜して読んでみたい

ので、新訳、旧訳（田中かな子氏の『くちばし』）の原書名などの書誌を教えていた
だきたい、と書きました（2006年5月
日のメール）。

翌18日に174月で定年退職しました者が
担当いたしました。正確を期すために、そ
の者にメールにて問い合わせています」と
返信をいただき、編集部には記録がない、
と分かりました。数日待ったものの進捗が
なかったため、次のような私の調査の進み
具合をお伝えして、確認をお願いしました。

「私の方で調べましたところ、
の ?

については、国際子ども図書館に198
1年版があり、その文章はこどものもと1
15号の訳文にあたると分かりました。

また、インターネット上に全文が掲載さ
れていて、ダウンロードできる

? は、原文の一部を簡
易な文章にかえ、また最後の部分などの一
部を削除したものでしたが、田中友子氏の
訳にあたる文章か、と思われました。

このあたりの事情について、お分かりのと
ころがありましたら、ご教示ください。」
（2006年5月23日のメール）

右のメールは私の調査結果について確認
を求めるものでしたが、翌日、いただいた
返信は、私の期待をはるかに上回るもので
した。そこにはこうありました。

「昨日、『くちばし』どれが一番りっぱ？」

を担当しました者と会い、「こどものもと」
版の底本と今回の単行本の底本のそれぞれ
コピーを入手しました。

ビアンキという人は、童話集とか雑誌と
か同じお話をいくつか書き分けている方の
ようです。

また『おしゃべりな森』の底本の表紙コ
ピーも入手しました。」

こうして、私はビアンキの『だれのくち
ばし』もつといいか』には二つの版があり、
そのそれぞれからの日本語版がつけられる
という流れを把握することになりました。

と同時に、福音館書店は出版物の書誌や出
版の経緯、あるいは経緯についての基本的
な情報を共有するシステムをもっておらず、
担当編集者にいちいち問い合わせるなど個
人の記憶に頼っている、と察知するに至り
ました。

特に問題なのは、同じ科学書編集部編
集者相互と編集長、あるいは編集部長との
編集の考え方や経験、それにそれぞれの出
版物の特色と評価についての簡潔に整理さ
れた理解の共有ができていないことです。
そのため、読者が必要とする翻訳作品の原
本の書誌のような簡単な問い合わせにも答
えることができません。

「見解」4との関連で興味深いのが、私
の調査がいくらか進んでいる、と知った退
職した担当編集者から科学書編集部を介し
て伝えられた、三日おいた26日の以下のコ
メントです。

「底本のことについて。気軽に『底本』

という言葉を使いましたが、『著者が手を
入れた決定版』というよつな意味ではなく、
『翻訳する前のものと本』という意味です。

ビアンキの孫から送ってもらった絵本の
各バージョンにも、ときどき微妙な変化が
あります。また、ビアンキ自筆の直しが入っ
ているものもありました。

翻訳者・田中友子さんの話では、ビアン
キの娘さん（現在80歳）は『編集者が勝
手に直したこともある』と言っていたそう
です。

なお、昨年か今年ロシアで発行されたビ
アンキの作品集（おそらく児童向け）に収
録されている『だれのくちばし』が一番り
っぱか？』は、田中友子さん訳の絵本と同じ
バージョンでした。また、会社の資料室に
ある内田莉沙子さんのビアンキ作品集2冊
も同じバージョンでした。

『ビアンキという人は童話集とか雑誌とか
に書き分けていた方の方です』というの
は、疑問です。

ビアンキの弟子のストラコフの場合は、雑
誌などで発表した作品を何度も推敲してい
き、3巻選集にまとめたそうですが、今回
のビアンキの『だれのくちばし』が一番り
っぱか？』のケースは別次元の問題ではな
いでしょうか。」

右のコメントは、米山氏の「見解」4の
aとはつきり矛盾しています。つまり、
「見解」はほんとうの事情を説明しておら
ず、米山氏の作文にすぎないことを証明し
ています。コメントの要点は三つです。す

なわち最初の一文、「底本のことについて、気軽に『底本』という言葉を使いましたが、『著者が手を入れた決定版』というように意味ではなく、『翻訳する前のもの本』という意味です」と、文章の半ばにある「ビアンキの娘さん」の「編集者が勝手に直したこともある」という言葉、そして最後の一文、「ビアンキの弟子のストラコフの場合は、雑誌などで発表した作品を何度も推敲していき、3巻選集にまとめたそうですが、今回のビアンキの『だれのくちばしが一番りっぱか?』のケースは別次元の問題ではないでしょうか」の3点です。

米山氏は「見解」4のaで、「この一文（オリジナル版の最後の一文）はないほうがよいと判断し、最初に出版された1924年版を底本に選びました」とあたかも底本を選ぶための判断基準が確定していたかのように書き、またその際、「エレナ・ビアンキ氏（著者の娘）の助言も大きな力となりました」と、助言があったとまで書いています。

ところが、じつさいに編集作業にあたって底本を決めた担当編集者は、すべての編集作業が完了して『くちばし どれが一番りっぱ?』が刊行された直後の2006年5月に、底本選びには一定の方針はなく、底本とは『翻訳する前のもの本』という素朴な意味にすぎない、とっているのです。

そして、エレナ・ビアンキ氏からは底本の決定のための助言どころか、「編集者が勝手に直したこともある」という、おそ

らく簡略版のあやうさを伝えていると思える言葉をそえています（それも田中友子氏がエレナ・ビアンキ氏から聞いた言葉を私に伝えてくれています）。

「見解」4の底本の選定にあたって編集部に共通理解があったかのような書き方とは正反対で、担当編集者はロシアの事情にいくらか通じてはいても、『くちばし どれが一番りっぱ?』を刊行してなおこのビアンキ作品をあいまいにしか理解できない状況にあった、とうかがえます。そして、私と退職した担当編集者をつなぐ労をとってくれたのは科学書編集部編集長（以下、編集長と略記）ですが、彼が担当編集者のコメントについて何らかの考えを伝えてくれたり、底本の選定についての考えを伝えてくれたこともいっさいありませんでした。それが2006年5月の現実です。

「見解」を書いた理由

米山氏はいつから私の批判に答えて「見解」を書く作業にとりかかったのでしょうか。私の批評、「『くちばし』年後の改題」がネバールランド誌の8巻に掲載されたのは2007年2月でした。私は編集長から、田中友子氏に訳文をなおす必要があれば3月いっばいに訂正原稿を書くように、伝えたと聞きました。すなわち、この段階で私の批評に対応していたのは科学書編集部で、訂正原稿を求めるという限られた対応でした。

田中友子氏の訂正原稿は3月いっばいにはとどかず、編集長は進捗状況を問い合わせたようで、私には「訂正原稿より反論の準備にかかっているようだ」と伝えてくれました。そして、6月になって「訂正原稿がとどいたが、『くちばし どれが一番りっぱ?』についてだけで、『おしゃべりなもり』のものはない」と伝えてくれました。その後、「おしゃべりなもり」の訂正原稿はとどかず、秋になって編集長が「このところ田中友子氏からの連絡はいつさいないが、ロシアの著作権使用許諾の書類に名前がでていたので、仕事はしているようだ」とつぶやくほどでした。つまり、その間、福音館書店は私の批評に対して対応策は何もとっていません。

そして、11月に入って、ネバールランド誌編集部田中友子氏が書いたとされる私の批評に対する反論、「クチバシ」どれが一番りっぱ?……今泉吉晴氏の批判に答える』（ネバールランド＜online＞、2008年4月に掲載）の最初の原稿が届けられました（私はこの情報を福音館書店の科学書編集部編集長から知らされました）。最初の原稿というのは、ネバールランド誌編集長の後の証言によれば、雑誌の掲載までに3回にわたり大幅な書きなおしがあった、という反論の性格にかかわる重大な事実があるからです。

この最初の原稿は、田中友子氏の両親がコピーを3部つくり、しかるべきところに配った、とされています。そして、その一部が松居直氏のもとにとどき、「大きな問

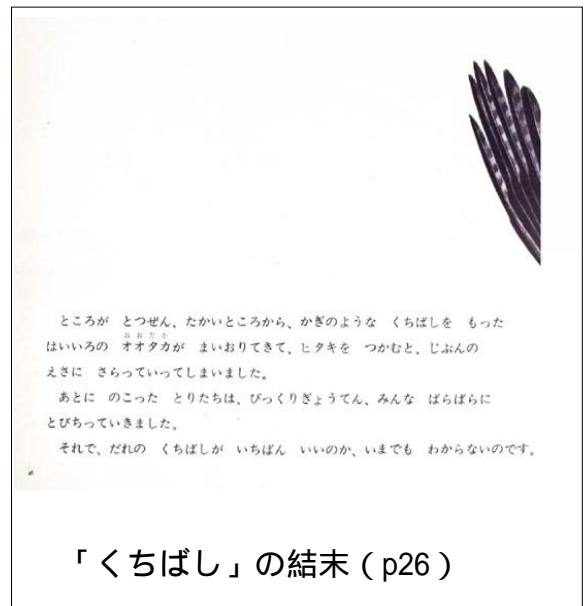
題であり、解決するようになり」と、米山書籍編集部長に指示があった、といわれています。これが事実であれば、最初の原稿の自身が福音館書店を動かしたことになります。その中身とは「今泉氏が指摘している誤訳は、編集担当者が訳者（田中友子氏）にそのような訳にするように」と指示してさせたもの」と、といった文言だった、とされています。

私にも福音館書店の内部の動きが慌ただしくなった、とわかりました。私は当時、福音館書店から刊行していたシートン動物記の翻訳をすすめており、編集長と定期的に連絡をとりあっていたのですが、特に12月の後半から2008年1月にかけて、京都の田中友子氏と両親との交渉で忙しく、シートン動物記の編集作業をすすめるのが事実上困難でした。

そして、2月15日、私は米山書籍編集部長からの申し入れにより、編集長の立ち会いのもとで面談しました。米山氏の用件は、私の批評について福音館書店として「見解」を発表するので了解しておいてほしい、というネバーランド誌への「見解」発表の通告の件と、シートン動物記シリーズ全12巻を刊行する私と福音館書店の約束について、会社の機構改革の予定があるため残り3巻の刊行ができなくなる恐れがある、そこで原稿の執筆をとめてほしい、という要請の件（事実上の刊行停止の通告）の2件でした。

米山氏はすでに見解を書き終えている様子で、私の批評について私に聞くというこ

とはいつさいありませんでした。すなわち、「見解」はもっぱら田中氏側と（下の段へ）



以上、「見解」4をめぐる事態の推移を見ました（「見解」4のcは手つかずですが）。信じがたい言葉の数々ですが、いずれもビアンキの作品理解の過程の中で出会った言葉であり、核心をつくものがあるはず

です。私の指摘した誤訳は編集者の「強要」による、という最初の原稿にあったという記述は、今、私たちが見ている田中友子氏の反論の中にはみあたりません。代わりに、見解2のファクトチェックの中にその片鱗を見せているように思われます。また、私の指摘した誤訳は『くちばし どれが一番りっば？』よりも、『おしゃべりなもり』に多くありました。最初の反論の原稿には、交渉の結果をまとめたものである、とい

の交渉結果をまとめたものである、という性格をもっています。（上の段へ）



『おしゃべりなもり』にふれた文章があったのではないかと考えることもできます。しかし「見解」4については、まだ事態の推移を見ただけです。それでも米山氏が書いていたことは、担当編集者の認識と実際にしてきたこととかけ離れており、後付けの説明にすぎないことは明らかでした。じつは私はビアンキの『だれのくちばしがもっといいか』を岩波少年文庫のために日本で最初に訳した網野菊氏の名を、波木井やよいさんの講演を通して、『せむしのこつま』の最初の完訳者であったと知って、とてもうれしく思いました。簡略版には網野菊氏の訳があり、オリジナル版は田中か子氏の訳がある、ということの意味はつ

きり見えた、と思えたからです。

波木井さんによれば、1970年9月の共同研究の開始時にすでに網野菊氏の訳の『せむしのこつま』は絶版で手に入りにくくなっていました。それに対してたくさんある、原作を改変した「にせもの」の版はいくらでも手に入りました。それらの「にせもの」をつくった著者の多くは網野氏の『せむしのこつま』の世話になっているはず。完訳を守ることに大きな意味があります。

1頁からの続き

落札できることが少ないのだ。

これに対して、個人から本を買う場合は、「掘り出し物」の可能性も時にある。最近ピッポ古書クラブにも、買い取りの依頼が時々くるようになった。店に持ち込みの場合は、量が少ないことが多い。中には1冊持ってきて、買ってくれという人もあるが、これはちょっと困る。もっともその1冊が古書として価値があれば話は別であるが、可能性は低い。

変わったところでは、1人のおじいさんがときどき壊れた乳母車に本を積んで足を引かずいながらやってくる。持ってきてくれる本の多くはいらぬことが多いが、時々4〜5百円で買うことになっている。

おじいさんは、あちらこちらから本を拾い集めてくるので、その内「掘り出し物」が届くことを期待を込めて買つのである。

電話が掛かってくる場合には、おおよそ本の内容を聞いて、量が多ければ、そのお宅まで伺つことにしている。最近量が多かつたのは、子どもの本だけで段ボール18箱というものだったが、内3箱は百数十本の子ども向けのビデオで、乗り物やデイズニーマナなどであった。「これどないしよう？」後は、ネットを通じての購入希望もたまにある。こちらは、子どもの本が多過ぎるのが嬉しい。リストを送ってもらい、おおよその査定をして、相手が納得したら、着払いで送ってもらうのである。

さて、新たな古書の購入手段の「骨董市」であるが、こちらは一点一点「振り」(声を発声して品物の値段を競る方法)で行われていく。

ぼくらが行ったときには既に競りは行われていて、はじめはタンスなど大型からおこなわれ、本などの小物は6時半過ぎから始まった。出品の紙類(本も含む)は戦前や戦後間もない頃の物が多いようで、埃まみれや、中には表紙が無いものもある。

最初のときは、競りに入っていき、何「円！」と声を出すこともできず、何が何だかわからない内に競りは終了したのである。(次号へ続く)

お知らせ

しずおか古本市

8月19日(水)〜25日(火)

午前十時から午後六時まで(最終日は午後五時まで)

松坂屋静岡岡店7F特設会場

ピッポ古書クラブも参加します。今回の目録は8月上旬にできます。希望の方はお申し出ください。お送りします。

今月の一冊

『なつですよ』(柴田晋吾・作 近藤薫 美子・絵 1260円 金の星社)



さて、このピッポ新聞が皆さまに届く頃、多くの地域では梅雨が開けていることでしょう。夏本番です。夏は野外で遊ぶのに子どもはいつぱい遊んでおおきくなりましょう！きみも、「こんにちは」って、夏にあいさつしてごらん。元気がでるよ。